

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて



昭和32(1957)年、佐野公一先生、きく枝先生によって設立された「セントラル英会話学校」は、その後、日本最大の外国語専門学校「神田外語学院」へと成長していきます。その成長を支えたのは、英語教育と職業教育を結合したかつてないカリキュラムでした。今回は、神田外語学院の運営に永年携わってきた佐野学園元理事の佐藤武揚氏にインタビューし、時代のニーズに応えながら新しい教育を提案してきた学院の変遷と専門学校から大学への編入を実現した経緯などについてお聞きしました。

神田外語グループの創業者、佐野公一先生は昭和32（1957）年に、神田駅の北口にあった「千代田予備校」を買われて、「セントラル英会話学校」を始めたと聞いています。昭和38（1963）年10月には、「セントラル米英語学院」を設立し、翌年の昭和39（1964）年1月には「神田外語学院」へと名称を変更しました。学院では、外国人教員をたくさん採用して、生きた英語を学ぶことを売りに学生募集を図ったようです。

昭和39（1964）年の東京オリンピックを境に、「仕事で使える英語」というものが急に求められるようになりましたね。神田外語学院の戦略は見事に当たって、社会人がたくさん入学したといえます。そして、さらに学校を大きくしようと、現在の1号館の建設の計画が始まるわけです。僕が学院に就職したのは、このタイミングでした。昭和43（1968）年の5月のことです。



僕は昭和14（1939）年に大分県玖珠郡九重町に生まれました。標高800mの山間にある農村です。両親は農業を営み、兄弟は11人です。小さい頃はとにかくやんちゃで、いたずらばかりしてましたよ。よく、怒られましたね。田畑を駆け巡って遊びました。兄弟では下から2番目で、男の子では末っ子だから甘やかされて育ちました。だから、東京の大学に行くこともできた。明治大学政治経済学部に入ったのは昭和35（1960）年4月。昭和39（1964）年3月に卒業すると、大正製薬に入社しました。

仕事は営業です。昭和37（1962）年に発売された「リポビタンD」が大ヒットしていた時代です。滝野川（北区）や池袋（豊島区）が担当でしたね。当時はエリアでトップの成績をあげると背広がもらえた。1年目、そして2年目もいただきましたよ。でも、2年で辞めました。当時、大正製薬は全国に製品を売っていたんですが、事業所は東京にしかない。地方の営業になると、ずっと旅館ぐらしですよ。町から町へと、薬局や卸問屋を回りながら、1カ月は東京に帰ってこれない。まさに、「薬売り」です。そんなのおかしい、と思って、社長宛の辞表を書いて、すっぱりと辞めました。

母は喜びましたね。母は、僕に教師になってほしかったんですよ。だから製薬会社を辞めたのは喜んでくれたし、僕も教育関係に進んでもいいかなって思うようになっていきました。（1/10）

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**君のことはよくわかった。奥さんを連れてきなさい
 女房面接があったのは後にも先にも僕だけでしょう**

大正製薬を辞めた後は、今で言うフリーターでした。営業で、色々な薬屋さんを回っていたときに、とても気に入ってくれた方がいて、「そうか、辞めたか。次のことが決まるまで、うちを手伝ってればいい」と言ってくれたのです。倉庫があって、その荷物の管理を任されて、倉庫の片隅にあった部屋で寝泊まりしてもいいと言ってくれたんです。

そんな気楽な暮らしを続けていたときに、結婚することになりました。僕が営業をしていたときに、薬局で化粧品の販売をしていた女性です。結婚して、でもまだ倉庫の仕事をしていたときのこと。長女も授かって、そろそろ本腰を入れて仕事を見つけなくちゃならん、と思っていた矢先に、妻が「あなたは教育関係に興味がある、っておっしゃっていたから、これはどうかしら？」と新聞の切り抜きを見せてくれたんです。それが神田外語学院の職員募集の広告でした。

履歴書を書き終わった後、「なんでこの年齢になって応募するのか、その動機を書きなさい」と妻が言うんです。僕はなるほど、と思い、手紙を書いて、履歴書と一緒に投函しました。すると、ほどなくして連絡があり、神田に面接に来てください、と言われたんです。

当時の神田は小さな飲食店が軒を連ねる飲屋街でした。大手町の会社で働くサラリーマンたちが、仕事が終わると神田に繰り出し、一杯やっていい気分になって、神田駅から帰るわけです。呑み屋と寿司屋が多かった。とにかく小さなお店がひしめき合っていた。サラリーマンの心のオアシスという感じかな。まあ、今と変わりませんね。





僕は大分の田舎育ちだったから、学校と言えば広い校庭があるものだと思っていた。でも、神田外語学院に行ってみると、ビルの部屋が教室。驚きましたね。

面接は、佐野公一先生、きく枝先生、そして当時事務長だった隆治会長の3人だったと記憶しています。一通り面接が終わると公一先生は、「きみのことはよく分かった。明日、奥さんを連れてきなさい」と言うんです。

おそらく、後にも先にも、佐野学園の職員で「女房面接」があったのは僕だけでしょうね。公一先生ときく枝先生は、妻に面接をして、そして「家庭を大切にみなさい」と指導してくださったようです。公一先生は、本名を「和一」といいます。だからこそ、家庭の「和」が一番大切だという信念をお持ちだったのだと思いますよ。とにかく、無事、就職できました。でも、思い出してみると、妻のおかげですね（笑）。

(2/10)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて



**公一先生は先見の明がある方でしたから、
ビジネス英語の必要性を強く直観されていた**

神田外語学院で働き出したのは、昭和43（1968）年の5月のことです。2年後の昭和45（1970）年4月には新しい校舎が建つ予定になっていました。僕が任されたのは学生募集のパンフレットです。学校のことを色々と調べて、パンフレットの構成を考えて、ようやく見本まで作り上げてから、佐野公一先生のところに持っていきました。すると公一先生は、パラパラと眺めてゴミ箱に捨ててしまいました。

そのときは唖然としましたが、今になって思えば、僕は的外れなことをしていたんです。当時、学院には大学受験クラスというのもあって、僕は予備校としての特徴に比重を置いたパンフレットを作ろうとしていたんです。でも、公一先生が求めていたのは、英語学校としてのパンフレットだったんです。

ただ、そのパンフレットを作るためには、やらなくちゃいけないことが山のようにありましたね。2年後の昭和45年に完成する1号館は地上7階、地下1階のビルです。ひと学年800人の学生を収容できる大きなビルです。それまで、神田駅北口にあった校舎では、学生数は昼と夜を合わせても100人ていどです。つまり、これまでの8倍の学生を集めなくちゃならない。新しい校舎ができて、一杯にならなければ、どこかに貸さなくちゃなりませんからね。



それも、英語教育だけです。当時の学院にあった英語のクラスは「英文秘書科」と「実務英語科」だけです。佐野公一先生ときく枝先生は、戦後まもなく貿易業を営んでいた時期があって、そのときに「ああ、これからの若者には仕事で使える英語が必要だな」と思われたようです。公一先生は先見の明がある方でしたから、今で言うビジネス英語の必要性を強く直観されていたのだと思いますよ。この2クラスには、すでに会社で仕事をしている社会人が主に来ていました。



大学受験クラスは確かに儲かります。学校としては収入の柱になりますよ。でも、公一先生は英語の教育に専念することを決めてらっしゃっていた。予備校は大学に合格させておしまいです。それよりも、英語力を身につけて、なおかつ国際コミュニケーションのできる人材を育てて世の中に送り出すことのほうが大切だと思われていたのでしょう。

でも、「英文秘書科」と「実務英語科」の2クラスだけでは800人は集まりません。どういう学科を作れば、学生たちは来てくれるのか？パンフレットを作るよりも、まずはそちらを考えるほうが先決でした。

(3/10)

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**「英語・プラス・ビジネス」という企業との連携に
 神田外語ほど熱心に取り組んでいる学校はなかった**

どうやって800人もの学生を募集するのか？ 公一先生は、若者たちが生きていく武器を得るために、実用的な仕事で使える英語を使えるようにと思って、学校を始めた。それならば、今、社会に求められている英語は何なのかを調べてみようと思ったんです。

いろんな会社を回りましたね。旅行会社、貿易商社、メーカー、ホテル、航空会社。それぞれトップの会社に行きました。日本航空、全日空、東亜国内航空、交通公社、帝国ホテル、芝パークホテル、プリンスホテル……。コネクションなんてまったくありません。アポイントなしの飛び込みで、「英語学校の者ですが、どんな人材を必要としているか教えてください！」と真っ正面から入っていった。すると、意外と対応してくれるものなんです。モノの売り込みじゃないから会ってくれたんだと思いますよ。

企業からしても、自分たちの会社で使える人材を育ててくれるのであれば、協力しますよ。それぞれの業界でどんな英語が必要とされているか、またその業界で働くためにはどんなスキルを身につければいいか、とにかく聞きまわりました。話せるだけじゃなくて、書類を作成したり、専門用語を覚えたり、そういった実務もできないといけないことも分かりました。みなさん親切でしたよ。なかには、「この本を使って学生に教えるといいですよ」と本をくれる方もいらっしゃってね。そのときに会った人から学院で教えてくれることになった方もいました。卒業生にも集まってもらった。社会で働く立場から、どんな英語が必要かをざっくばらんに話してもらった。



そういったアドバイスを職員たちと議論して、新しい学科を決めていったんです。「国際ガイド科」「国際ホテル科」「スチュワーデス科」などができました。世界で仕事ができることを強調するために「国際」という言葉を頭にした学科名も多いですね。

こういった仕事を通じて、英語教育と職業教育というものが次第に融合していったんです。当時の各種学校で神田ほど「英語・プラス・ビジネス」に力を入れているのは他にはなかった。後からずいぶんこのスタイルの学科を設ける学校は現れましたけどね。それは、神田外語学院の大きな特徴になりましたね。

その後も、神田外語学院と企業の連携はどんどん深まっていきましたよ。ホテルでのインターン制度を設けたのも昭和40年代の終わりだったと記憶しています。週に3回ほど学校で学んで、あとはホテルで働く。ホテルに泊まることもできたから、全国からこのクラスを目指して若者たちがやってきました。(4/10)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて



学院に潜り込んだ学生運動の残党なんかに構っている暇なんかなかった

新しい学科の構想が整い、学生募集のパンフレットもできました。でも、高校生にその内容を伝えていかなければ、学生が集まるはずはありません。当時、神田外語学院のような各種学校の広報を行う会社があって、そこが全国の高校で宣伝ができるツアーを企画していたんです。そのツアーに参加して、全国の高校を回りましたね。事務長だった佐野隆治会長と手分けしました。神田外語のほかには、東京調理師専門学校や文化服装学院、日本工学院など今も続く各種学校の名門校が参加しました。

説明会に来る高校生たちはとても熱心でしたよ。1回の説明会に数百名の高校生が集まった。たいてい、1日に2回。それだけ求められていたということでしょうね。僕も、「神田に来れば、ホテルや旅行会社で使える英語を学べるよ」と熱く語りましたね。

昭和45（1970）年4月、神田外語学院の1号館が完成し、第1期生たちが入学してきました。有り難いことに定員の800名以上集まりました。入学式はサンケイホールです。翌年には2学年になり、合わせて1600名の学生が学ぶようになりました。



昭和40年代と言えば、世間では学生運動が盛んだった時代です。日米安保条約、ヴェトナム戦争、成田空港建設。学生たちに反旗を翻して、戦っていた。昭和44（1969）年には東大紛争がありました。安田講堂の屋上に立て籠る学生たちに警察隊が放水する映像は今も鮮明に記憶しています。631名もの学生が逮捕された。東京駅の辺りにも、もの凄い数の学生たちが繰り出して、デモが行われました。佐野会長とふたりで観に行った覚えがあります。野次馬ですけどね（笑）。



安田講堂の後、学生運動は下火になっていきます。学生運動の活動家の残党というのが社会人になって、今度は会社で労働運動を始める。神田外語学院も標的になりましたよ。それは、学院に大学受験クラスがあったからです。活動家たちは、予備校生を洗脳して、大学での活動につなげようとしていたんです。そんな活動家が学院にも潜り込んだんですよ。女性の職員だったんですけど、仲間を呼んで、1号館の前で座り込みをして、授業を妨害していたんです。

でも、学生運動なんかに構ってられなかったんです。だって、学生が1600人もいるんだから、時間表を作らなくちゃいけない、先生は探してこなくちゃいけない。もう、てんやわんやの忙しさですよ。だから、活動家の女性に何を言われても相手にしなかった。すると、彼女は興奮して怒って、傘で胸を突いてきたんですよ。それで、現行犯逮捕。傷害事件で神田警察に連れていかれました。それで済みです。本当に忙しかったら、学生運動なんてどうでもよかったんです。（5/10）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて



最新の設備を平等に使わせるために
時間表を作る徹夜作業が続きました

次に神田外語学院が大きくなったのは、昭和51（1976）年のことです。この年、学校教育法が改正になって、「専修学校」が認められるようになりました。いわゆる、専修学校法の制定です。それまでの各種学校ではなく、「専門学校」というを文部省が法律のなかできちんと位置づけたわけです。最終学歴としても認められることになった。これで18歳人口の進学先の一つとして専門学校がきちんとした地位を得ました。

（※1）

神田外語学院もすぐに申請を行い、最初に認可された数十校の専修学校のひとつとなりました。この年には3号館が完成したので、学生数は2学年合わせて4000人になりました。学生数のピークの時期ですね。

当時事務長だった佐野隆治会長は新しいテクノロジーを英語教育にどんどん取り入れていきました。本館にはすべての教室にテレビがあって、スタジオからアニメーションを放送するなんてこともやっていた。それとコンピュータ。もうタイプの時代じゃないよとばかりに、東芝と共同開発したCAI（コンピュータ・アシステッド・インストラクション）というシステムを導入した。それが昭和49（1974）年のことです。

でも、設備には限りがある。学生たちはみんな使いたがるから、平等に使えるよう時間表を組んでいかなくちゃならない。本当に頭の痛い作業でしたね。それに社会の現場で働いている教員の方は講義できる曜日が限られているから、授業を組むのは一苦労です。新学年の準備の時期になると徹夜で時間表を作りました。



昭和50（1975）年ぐらいから、佐野公一先生は体調を崩しがちでした。それでも、公一先生は大学を設立するという夢を持ち、候補地を探して色々なところに視察に行かれていました。昭和53（1978）年に公一先生は亡くられました。現在、神田外語大学が建っている千葉の幕張新都心を視察に訪れ、その場で倒れたんです。その後、佐野隆治会長が実質的な経営者として、大学づくりの準備を進めていきました。（6/10）

1. 昭和50年当時、18歳人口156万人のうち、大学と短大の入学者は約59万人。その後、専門学校の入学者数は増え続け、平成4（1992）年には36万人に達した。（出典：「18歳人口及び高等教育機関への入学者数・進学率等の推移」（文部科学省「学校基本調査」ほかより作成）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて



佐野会長には「学校の中のことは俺がやる。外のことはお前がやってくれ」と言われました

公一先生には生前、「海外の大学で勉強してみたらどうだ」とおっしゃっていただきました。大学設立のためにです。僕は昭和55（1980）年と56（1981）年の2年間、アメリカのデューク大学に留学しました。職員の長期海外研修は初めてでした。アメリカの教育の実態を知るために、現地の幼稚園から高校まで視察に行き、行われている教育を自分の目で確かめました。大学の授業で印象に残っているのは、社会で実際に活躍されている方が大学の講義を持っていることでした。学生たちは、プロの現場の生の声を聞かせてもらいながら、論文を書いていく。素晴らしいと思いました。日本は大学の先生になってしまうと、実社会のことには関心を持たない方もいましたからね（※2）。



デューク大学での留学から日本に帰ってきたのは、昭和57（1982）年の3月です。当時は、大学の設置の準備が本格的に始まりましたが、僕は学院のほうの仕事に専念していました。5年後の昭和62（1987）年4月、神田外語大学が開学しました。年が明けた1月11日、佐野きく枝先生がお亡くなりになった。きく枝先生には本当に可愛がっていただきました。きく枝先生は母のような存在でした。佐野隆治会長は、理事長に就任して、大学の経営を軌道に乗せることに力を注いでいました。僕は学院の事務長になって、学院の実務を任されるようになりました。

話はちょっと遡りますが、デンバー大学での留学を終えて日本に帰ってきたばかりのことです。文化服装学院の理事長の大沼淳（すなお）さんから電話がかかってきたんです。僕が対応すると、大沼さんは「神田外語は大きな学校なのに、なんで専門学校協会の役員をしてくれないんだ。ぜひやってほしい」とおっしゃるんです。



昭和51（1976）年に専門学校が認められて、それぞれの分野ごとに協会ができていました。神田外語学院はもちろん関係する協会に加盟はするのだけど、役職には就かない。事務長だった佐野隆治会長も、昭和53（1978）年に佐野公一先生が亡くなられたうえに、大学の設立準備もあり、協会の仕事どころではなかったのでしょう。

大沼さんからの話を佐野会長にお伝えすると、「学校の中のことは俺がやる。外のことは君がやってくれ」と言われました。それからずっと色々な団体の役職、そして文部省への対応をしてきましたね。でも、何かあれば佐野会長に報告するし、状況を伝えて判断を仰いでいました。だから、外の仕事が増えても常に一緒に仕事をしているという感覚がありましたよ。（7/10）

2. 佐藤武揚氏の留学後、佐野学園では奉職年数の長い中堅職員が海外で長期間にわたり留学や視察の行える制度を設けた。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて



**主張を持ってしっかりと議論する
 そうすると意識も少しずつ変わってくる**

神田外語学院の運営、そして協会団体の仕事に力を注いできた僕にとってもうひとつの大きな仕事は大学への編入制度の実現でした。昭和51（1976）年の専修学校法の制定で、専門学校は短大と同じ扱いになるはずでした。大学にも編入できるはずだったのに、専門学校の卒業生を受け入れる大学はほとんどなかった。

おかしな話です。神田外語学院の学生たちは勉強熱心だから、もっと学びたいと大学への編入を希望しても通らない。それならばと、佐野隆治会長は、公一先生の遺志を継いで神田外語大学を設立した。でも、編入は認められない。学院の学生たちからも、同じ経営なのになぜ編入させてくれないんだという声も上がっていましたしね。

ちょうどこの頃、「ダブルスクール族」が現れました。大学に通いながら、専門学校にも行く大学生たちです。神田外語学院でも夜間クラスの4割は大学生でしたよ。それぐらい専門学校の学びは必要とされていたんです。ちょうどこの頃から、僕は、専門学校関係の協会の仕事を積極的にやるようになり、文部省にも通うようになりました。

文部省に行くと、私学関係の担当官を訪ねて、「専門学校では、求められる人材を育成するための教育をしっかりとやっている。大学と同じ高等教育として認めてほしい」と言いました。週に1回は行っていたんじゃないかな。



とにかく通って、担当官に自分の考え方を伝える。でも、相手には相手の事情があるから、それも考える。立場が違えど、大事なことは、社会に貢献できる人材を育成すること。それは文部省も専門学校も共通で考えていました。だから、しっかりと議論する。そうすると意識も少しずつ変わってくるんです。

平成3（1991）年に法律が改正されて、専門学校での学びが大学での30単位まで認められるようになりました。これで編入は実現した。でも現実には厳しかった。大学が認める単位は2単位とか4単位ぐらいなんです。学術的な学びをする大学と職業に役立つ学習をする専門学校では共通の基準がないんです。比べようがない。

そこで僕は、専門学校の単位を認めてもらうのではなく、学年で認定してもらうこと提案し始めました。専門学校で2年間学んだんだから、成績が優秀であれば、大学の3年に編入できる。そういったかたちにすべきだと文部省に対して言い始めたんです。（8/10）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて



「大学一辺倒の教育じゃダメだよ」と、僕は文部省にも堂々と言ってきた

3年次編入を実現するためには、調査が必要だと思いました。文部省に働きかけ、生涯学習局からの委託で平成7（1995）年から9（1997）年の3年間をかけて調査を行いました（※3）。全国の大学にアンケートを送ったり、実際に訪問しながら調査を進めてきました。すると、専門学校からの編入生の単位を認めない学校がある一方で、どんどん認めている大学もあった。調べれば調べるほどその傾向が見えてきました。

実際、大学では中途退学者もいるので、専門学校の卒業生が入ってくれば学生の補充になります。大学には大学の都合があるんです。調査をすることで、文部省もそれをはっきりと認識したんじゃないのかな。調査の最後の年には文部省が3年次編入を検討し始め、平成10（1998）年6月には決まりました（※4）。

僕は文部省に、「専門学校を法律上の言葉だけじゃなくて、現実として認めてくれよ」と言い続けてきた。神田外語学院で言えば、外国語教育＋ビジネス教育を実践してきた。それは社会が求める学びです。大学一辺倒の教育じゃダメだよと堂々と言ってきた。



だって、神田外語学院は、ずっと時代に即した教育をしてきたんだから。僕のところには昭和45年に入学した卒業生が今でも連絡してくれる。そして「今でも英語を使った仕事をしていますよ」と言ってもらえる。それは容易いことじゃないですよ。神田外語学院の教育の証だと思いますよ。改めて、3年次編入によって、その価値が、ようやく認められて、正直ほっとしました。

神田外語大学でも平成13(2001)年から3年次編入が始まりました。嬉しかったですよ。現在も、毎年数十人単位で編入しているし、他の大学に編入する学生たちもたくさんいる。今では、「神田外語学院の学生なら何人でも編入させるよ」と言ってもらえる外国語大学もあります。ただ、専門学校が学校教育法の第1条で定める学校ではないことには変わりありません。いつか、専門学校がきちんとした高等教育機関として1条で定められる。それが僕の望みですね。(9/10)

3. 「専修学校職業教育高度化開発研究『専門学校卒業生(語学系・工業系)の大学編入の可能性について』」。

4. 文部省では平成10(1998)年6月に「専修学校の専門課程(修了年限2年以上総授業時間数1,700時間以上)の修了者は大学に編入学できる」ことを決定した。

第13回 佐藤武揚 学校法人佐野学園元理事
専門学校の可能性を追求し続けて

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**社会人教育のニーズが高い神田という場所
 求められる学びを本気で探してほしい**

ちょうど大学編入のための3年間の調査をしていた平成8（1996）年、東京の新橋に「神田外語キャリアカレッジ」が開校しました。これはもともとソニーがやっていた英会話学校「ソニー・ランゲージ・ラボラトリー」の事業を継承したものです。

ソニーはオーディオメーカーとして音響機器をやっていたから、LL教育の機材などの分野へも事業を広げており、英会話教育とは相乗効果があると思ったのでしょう。でも、英会話学校の経営はうまくいかなかった。企業として撤退を決めたものの、受講生も教員もいる。ソニーのブランドを傷つかずに引き継いでくれるのは神田外語学院しかない、と判断したのでしょう。

校長に就任した僕は、自分のネットワークをフル活用して学生募集をかけました。受講期間も、1年コースを半年や3カ月にして、忙しい社会人の時間の感覚に合わせました。官公庁や企業の関係者がずいぶんと来てくれましたよ。でも、昼がダメだった。ビルはテナントだから夜が入っても、昼がガラガラであれば採算が合わない。結局、平成18（2006）年3月に新橋からの撤退を決めました。

この40年間で、各種学校が専門学校になり、専門学校から大学への編入が認められるなど大きな変化がありました。神田外語学院は、大学受験コースを辞めて、英語の職業教育に専念したけれど、今では「大学に行きたければ予備校じゃなくて、神田外語学院に行ったほうがいい」という評判が立つようになりました。これも時代の変化ですね。



僕は、神田という立地を生かして、何ができるかを本気で考えなければならないと思っています。この地でレベルの高い社会人教育を望んでいる人は潜在的に数多くいるはずです。かつて、朝から晩まで学生たちが大挙して押し寄せた時代があった。時代が求める学びとは何か？ 若い職員のみなさんがそれを本気で探し、実現すれば、あの光景を再現するのは不可能ではないと信じています。(10/10)

佐藤武揚（さとうたけあき）

昭和14（1939）年大分県九重町に生まれる。明治大学政治経済学部卒業後、大正製薬に入社。昭和43（1968）年5月に神田外語学院に就職。以後、事務長、副学院長、キャリアカレッジ校長を経て、平成11（1999）年に理事に就任。平成23年に理事を退任し、現在は評議員を務める。

（社）東京都専修学校各種学校協会代表幹事をはじめ、数多くの教育団体の役職を務めてきた。趣味は絵画や写真。佐野きく枝先生が奨励した英語劇では、背景等の舞台美術も担当したという経験も持つ。令和3年（2021）年9月永眠。享年81歳。